

キツネメバル

-種苗生産および放流技術開発-

栽培水産試験場 栽培技術部

成果の要約

キツネメバルの栽培漁業を成功させるには、安定的かつ効率的に種苗を生産し、いつ、どこで、どのくらいのサイズを放流すればいいのかわかりやすくする必要があります。現在、効率的な種苗量産技術が開発され、放流技術では移動、成長及び混獲率等が明らかになってきました。

研究の背景

- 日本海の檜山海域では、貴重な磯根資源ですが、資源水準が低く人工種苗を用いた増殖対策が強く望まれています。
- 種苗を放流して資源を増やすには、人工種苗生産技術と放流技術の開発が不可欠です。

研究の目的

- キツネメバルを安定的に効率よく生産する技術の開発と放流した人工種苗が安定して生き残るための技術開発を目的としました。

研究の成果

- 産仔から20日間止水条件で飼育できる技術を開発しました。
- 標識放流の結果から、成長が把握され、放流魚のほとんどは放流場所周辺に留まることが明らかになりました。
- せたな町上浦漁港に水揚げされた各銘柄のうち、小小サイズから大サイズまでの銘柄で放流魚が確認されています。

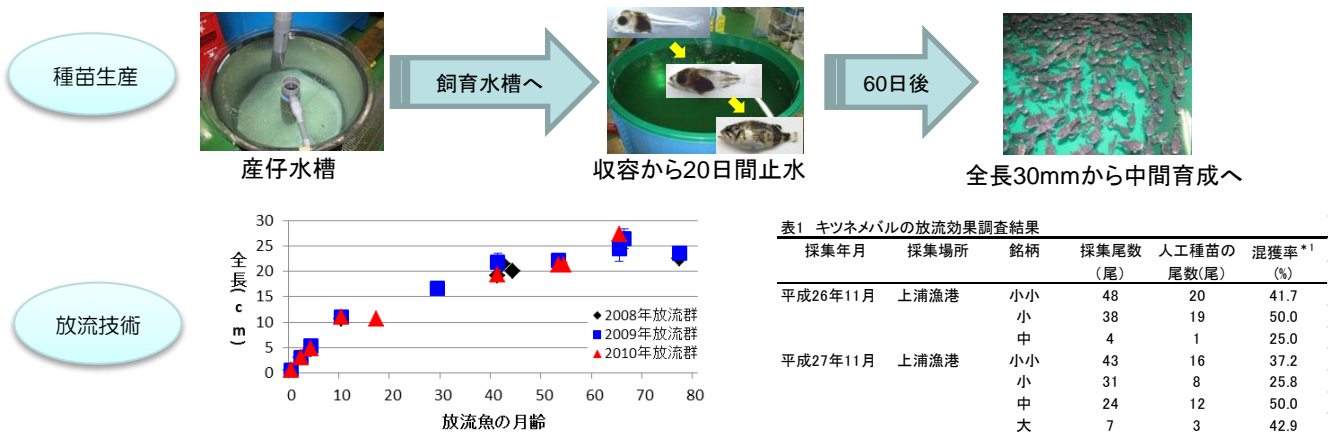


図1 再捕された標識魚の経過日数と全長の推移 (縦棒: 標準偏差)

表1 キツネメバルの放流効果調査結果

採集年月	採集場所	銘柄	採集尾数 (尾)	人工種苗の 尾数(尾)	混獲率*1 (%)
平成26年11月	上浦漁港	小小	48	20	41.7
		小	38	19	50.0
		中	4	1	25.0
平成27年11月	上浦漁港	小小	43	16	37.2
		小	31	8	25.8
		中	24	12	50.0
		大	7	3	42.9

*1: 混獲率とは、採集尾数に対する人工種苗の割合を示す

成果の活用策

- キツネメバルの種苗量産技術の開発により、民間施設に技術移転ができます。また、放流技術の開発により、効率的に資源を増やす方法を検討できるようになります。

経常研究 平成18年～